

汽車は流星の疾 命や《まきに、二百里の春を貫 づらぬ《いて、行くわれを七条 へちじよう《のプラットフォームの上に振り落す。余 へ《が踵 弁かと《の堅き叩 命た《まきに薄寒く響いたとき、黒きものは、黒き咽喉 《の《から火の粉 へ《をぱと吐 命《いて、暗い困 へ轟 へ《と去った。

たださえ京は淋 命び《しい所である。原に真葛 命くず《、川に加茂 命も《、山に比叡 命ひえ《と愛宕 命た《と鞍馬 命らま《、ことごとく昔のままの原と川と山である。昔のままの原と川と山の間にある、一条、二条、三条をつくして、九条に至っても十条に至っても、皆昔のままである。数えて百条に至り、生きて千年に至るとも京は依然として淋しかろう。この淋しい京を、春寒 命るさむ《の宵 命よい《に、とく走る汽車から公釈 命えしやく《なく振り落された余は、淋しいながら、寒いながら通らねばならぬ。南から北へ一町が尽きて、家が尽きて、灯 命《が尽きる北の果 命て《まで通らねばならぬ。

「遠いよ」と主人が後 命しろ《から云う。遠いぜ」と居士 命し《が前から云う。余は中の車に乗って顛 命ふる《えている。東京を立つ時は

日本にこんな寒い所があるとは思わなかった。昨日きのつゝまでは擦すゝれ合 ぬゝう身体 弁らだゝから火花が出て、むくむくと血管を無理に越す熱き血が、汗を吹いて総身 せうみゝに煮浸 ぬじゝみ出はせぬかと感じた。東京はさほどに烈 ぬげゝしい所である。この刺激の強い都を去つて、突然と太古 ぬたいこゝの京へ飛び下りた余は、あたかも三伏 せんぷくゝの日に照りつけられた焼石が、緑の底に空を映さぬ暗い池へ、落ち込んだようなものだ。余はしゅつと云う音と共に、倏 忽 ぬゆつこつゝとわれを去る熱気が、静なる京の夜に震動を起しはせぬかと心配した。

「遠いよ」と云つた人の車と、遠いぜ」と云つた人の車と、顫えている余の車は長き轅 弁じゝを長く連 ぬうらゝねて、狭 ぬせばゝく細い路 ぬみちゝを北へ北へと行く。静かな夜 ぬよゝを、聞かざるかと輪 ぬりんゝを鳴らして行く。鳴る音は狭き路を左右に遮 ぬさえぎゝられて、高く空に響く。かんかららん、かんかららん、と云う。石に逢 ぬあゝえばかかん、かからんと云う。陰気な音ではない。しかし寒い響である。風は北から吹く。

細い路を窮屈に両側から仕切る家はことごとく黒い。戸は残りなく

鎖をざざとされている。ところどころの軒下に大きな小田原提灯 赤だ  
わらちよつちんが見える。赤くせんざいと書いてある。人気 ひと  
けのない軒下にせんざいはそもそも何を待ちつつ赤く染まっている  
のかしらん。春寒 食るさむの夜 余を深み、加茂川 弁もがわの水  
水さえ死ぬ頃を見計らつて桓武天皇 弁むてんのうの亡魂でも食  
いに来る気かも知れぬ。

桓武天皇の御宇 きよつに、せんざいが軒下に赤く染め抜かれてい  
たかは、わかりやすからぬ歴史上の疑問である。しかし赤いせんざい  
と京都とはとうてい離されない。離されない以上は千年の歴史を有す  
る京都に千年の歴史を有するせんざいが無くてはならぬ。せんざいを  
召したまえる桓武天皇の昔はしらず、余とせんざいと京都とは有史  
以前から深い因縁 へんねんて互に結びつけられている。始めて京都  
に来たのは十五六年の昔である。その時は正岡子規 余さおかしき  
といつよてあった。麩屋町 余やまちの終屋 へひらぎやとか二つ  
家へ着いて、子規と共に京都の夜 余るを見物に出たとき、始めて余  
の目に映ったのは、この赤いせんざいの大提灯である。この大提灯を見  
て、余は何故 余にゆえかこれが京都だなと感じたぎり、明治四十年

の今日《こんにち》に至るまでけしして動かない。ぜんざいは京都で、京都はぜんざいであるとは余が当時に受けた第一印象でまた最後の印象である。子規は死んだ。余はいまだに、ぜんざいを食った事がない。実はぜんざいの何物たるかをさえ弁 行きま《えぬ。汁粉 呑むこと》であるか煮小豆 命てあずき《であるか眼前 弁んぜん》に髻髻 ほうぶつ《する材料もないのに、あの赤い下品な肉太 呑くふと》な字を見ると、京都を稲妻 《ひなずま》の辻 すみや《かなる閃 呑ひらめ》きのうち  
に思い出す。同時に――ああ子規は死んでしまった。糸瓜 《ちま》のごとく干粘 《ひから》びて死んでしまった。――提灯はいまだに暗い軒下  
にぶらぶらしている。余は寒い首を縮 ちぢ《めて京都を南から北へ振ける。

車はかんかららんに桓武天皇の亡魂を驚 呑おどろ《かし奉 呑てまつ》て、しきりに馳 弁《ける。前なる居士 《ごじ》は黙つて乗っている。後 呑うしろ《なる主人も言葉をかける気色 呑しき》がない。車夫はただ細長い通りをどこまでもかんかららんと北へ走る。なるほど遠い。遠いほど風に当らねばならぬ。馳けるほど顫 呑ふる《えねばならぬ。余の膝掛 呑ひざかけ》と洋傘 呑ようがさ《とは余が汽車から振り落され

たとき居士が拾ってしまった。洋傘は拾われても雨が降らねばいらぬ。この寒いのに膝掛を拾われては東京を出るとき二十円五十銭を奮発した甲斐 弁いがない。

子規と来たときはかように寒くはなかった。子規はセル、余はフロンネルの制服を着て得意に人通りの多い所を歩行 愈るいいた事を記憶している。その時子規はどこからか夏蜜柑 念つみかんをかうて来て、これを一つ食えと云つて余に渡した。余は夏蜜柑 念つみかん皮を剥きいて、一房 ひとぶさごとに裂いては噛 弁み、裂いては噛んで、あてももなくさまよつてしていると、いつの間 余にやら幅一間ぐらの小路 へよつじに出た。この小路の左右に並ぶ家には門並 弁どなみ 一尺ばかりの穴を戸にあけてある。そうしてその穴の中から、もしもしと云う声がする。始めは偶然だと思つていたが行くほどに、穴のあるほどに、申し合せたように、左右の穴からももしもしと云う。知らぬ顔をして行き過ぎると穴から手を出して捕 せらまえそうに烈 食げい呼び方をする。子規を顧 弁えりみて何だと聞くと妓楼 せきろうだと答えた。余は夏蜜柑を食いながら、目分量 弁ふんりよつて一間幅の道路を中央から等分して、その等分した線の上

を、綱渡りをする気分で、不偏不党 忝へんふとうに練 衿をて行つた。穴から手を出して制服の尻でも捕まえられては容易ならんと思つたからである。子規は笑つていた。膝掛をとられて顫 忝るをえていゝ今の余を見たら、子規はまた笑うてあろう。しかし死んだものは笑いたくても、顫えているものは笑われたくても、相談にはならん。

かんかららんは長い橋の袂 忝もとを左へ切れて長い橋を一つ渡つて、ほのかに見える白い河原 忝わらをを越えて、藁葺 忝らぶきとも思われる不揃 忝そろいな家の間を通り抜けて、梶棒 忝じぼうを横に切つたと思つたら、四抱 忝かかえか五抱 忝つかかえもある大樹 忝いじゆの幾本となく提灯 忝ちようちんの火にうつる鼻先で、ぴたりと留まつた。寒い町を通り抜けて、よくよく寒い所へ来たのである。遙 忝ゆるかなる頭の上に見上げる空は、枝のために遮 忝さえぎられて、手の平 忝ひらほどの奥に料峭 忝りよつしよつたる星の影がきらりと光を放つた時、余は車を降りながら、元来どこへ寝るのだらうと考えた。

「これが加茂 忝もの森 忝もりだ」と主人が云う。加茂の森がわれわれの庭だ」と居士 忝じが云う。大樹 忝いじゆを繞 忝めぐつて、

逆きやく《》に戻ると玄関に灯《》が見える。なるほど家があるなど気がついた。

玄関に待つ野明《》あき《》さんは坊主頭《》ほうずあたま《》である。台所から首を出した爺さんも坊主頭である。主人は哲学者である。居士は洪川和尚《》こうせんおしよ《》の公下《》えか《》である。そうして家は森の中にある。後《》うしろ《》は竹藪《》たけやぶ《》である。顫えながら飛び込んだ客は寒がりである。

子規と来て、せんざいと京都を同じものと思ったのはもう十五六年の昔になる。夏の夜《》あゝの月一円《》まる《》きに乘じて、清水《》きよみず《》の堂を徘徊《》はいかい《》して、明《》あきら《》かならぬ夜《》よる《》の色をゆかしきもののように、遠く眼《》まなこ《》を微茫《》ひぼろ《》の底に放つて、幾点の紅灯《》こうとう《》に夢のごとく柔《》やわら《》かなる空想を縦《》たて《》ほしい《》ままに酔《》よめ《》わしめたるは、制服の鈕《》ボタン《》の真鍮《》真鍮《》へんちゆう《》と知りつつも、黄金《》おうごん《》がね《》と強《》つよ《》いたる時代である。真鍮は真鍮と悟ったとき、われらは制服を捨てて赤裸《》せきらく《》まるはだか《》のまま世の中へ飛び出した。子規は血を嘔《》おう《》いて新聞屋となる、余は尻を端折《》はしよ《》つて西国《》さいこく《》へ出奔《》いっしゅ《》する。

御互の世は御互に物騒 余つそう《》になった。物騒の極 きよく《》子規はとうとう骨になった。その骨も今は腐れつつある。子規の骨が腐れつつある今日 《こんにち》に至つて、よもや、漱石が教師をやめて新聞屋になろうとは思わなかつたろう。漱石が教師をやめて、寒い京都へ遊びに来たと聞いたたら、円山 余るやま《》へ登つた時を思い出しはせぬかと云うだろう。新聞屋になつて、糺 倉だす《》の森 毛り《》の奥に、哲学者と、禅居士 倉んこじ《》と、若い坊主頭と、古い坊主頭と、いじよだ、ひっそり閑 弁ん《》と暮しておると聞いたたら、それはと驚くだろう。やっぱり気取つているんだと冷笑するかも知れぬ。子規は冷笑が好きな男であつた。

若い坊さんが 御湯に御這入 おはい《》り」と云う。主人と居士は余が顫 余る《》えているのを見兼て 公 《》つ《》、まず這入れ」と云う。加茂 弁も《》の水の透 余 《》き徹 余 お《》るなかに全身を浸 《》つけたときは齒の根が合わぬくらいであつた。湯に入 余 《》つて顫えたものは古往今来 《》おつこんらい《》たくさんあるまいと思う。湯から出たら 公ま ず眠 余ぶ《》れ」と云う。若い坊さんが厚い蒲団 余 とん《》を十二畳の部屋に担 弁つ《》ぎ込 《》む。御内 余んない《》か」と聞いたたら 太織 余



とおりだ」と答えた。公のために新調したのだ」と説明がある上は安心して、わがものと心得て、差支なきしつかえなしと考えた故、御免「あめん」を蒙「うぶ」て寝る。

寝心地はすこぶる嬉うれしかったが、上に掛ける一枚も、下へ敷く一枚も、ことごとく蒲団なので肩のあたりへ紅の森の風がひやりひやりと吹いて来る。車に寒く、湯に寒く、果はては蒲団にまで寒かったのは心得ぬ。京都では袖をてのある夜着「よぎ」はつくらぬもの由を主人から承うけたまわ「て、京都はよくよく人を寒がらせる所だと思う。

真夜中頃に、枕頭「まくらもと」の違棚「ちがいだな」に据す「えてある、四角の紫檀製「むたんせい」の杵「きね」に嵌「はめ込」まれ、た十八世紀の置時計が、チーンと銀腕「きんわん」を象牙「ぞうげ」の箸「はし」で打つような音を立てて鳴った。夢のうちにこの響を聞いて、はっと眼を醒「さめ」ましたら、時計はとくに鳴「な」りやんだが、頭のはかはまだ鳴「な」っている。しかもその鳴りかたが、しだいに細く、しだいに遠く、しだいに濃「こまや」かに、耳から、耳の奥へ、耳の奥から、脳のかへ、脳のかから、心の底へ浸「ひた」み渡「わた」て、心の底から、心

のつながるところで、しかも心の尾を引いて行く事のできぬ、遐へ  
るかなる国へ抜け出して行くように思われた。この涼しき鈴を引  
の音をなが、わが肉体を貫くらぬいて、わが心を透すかして無  
眼の幽境に赴くもむくからは、身も魂も氷盤のごとく清く、雪  
を引くのごとく冷くひややかになくてはならぬ。太織の夜具のな  
かなる余はいよいよ寒かった。

暁をかつきは高い櫛をひらき、の梢に鳴く鳥を引らす  
て再度の夢を破られた。この鳥はかあとは鳴かぬ。きやけえ、くうと曲  
折して鳴く。単純なる鳥ではない。への字鳥、くの字鳥である。加茂を  
も引く明神をよつじんがかく鳴かして、うき我れをいとど寒から  
しめ玉うの神意かも知れぬ。

かくして太織の蒲団を離れたる余は、顫えつつ窓を開けば、依稀を  
ききたる細雨をきいては、濃かに紅の森を罩めて、紅の森はわが  
家を遠くを透りて、わが家の寂然をきせんたる十二畳は、わ  
れを封じて、余は幾重をくえともなく寒いものに取り囲まれてい  
た。

春寒 春るさむの社頭に鶴を夢みけり

底本：夏目漱石全集10「ちくま文庫、筑摩書房

1988 昭和63)年7月26日第1刷発行

底本の親本：筑摩全集類聚版夏目漱石全集「筑摩書房

1971 昭和46)年4月～1972 昭和47)年1月

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年5月12日公開

2011年5月25日修正